

# 美しい手賀沼の愛する市民の連合会 2024 年度研修会

## 「谷津から手賀沼まで～『小さな流域』から考える手賀沼のこれから」報告

### 【概要】

日時/2024年12月15日(日) 9:30～15:00 ※終日マイクロバスで移動。

集合/①8:50 発柏駅東口清水メガネ店前

②9:00 発我孫子駅北口 我孫子ふれあい広場前

募集人数/24名(先着順) ※美手連会員団体の会員限定。

参加者/16名(講師2名含む)

参加費/1500円(お弁当代他)

当日の内容/

#### ① 谷津の散策と見学

柏市柳戸谷津・手賀の丘公園・弘誓院周辺

柏市原ノ下・大根切谷津

講師/かしわ環境ステーション 柄澤保彦さん

#### ② レクチャー「手賀沼と谷津の自然と歴史について」

講師/かしわ環境ステーション 山口由木さん

報告者/半沢裕子

### 〈見学コース〉

2024年12月15日



## 【目的】

手賀沼のまわりに残る谷津を案内していただき、手賀沼との関連と、手賀沼の環境を守るために谷津の保全も重要であることを理解する。

## 【当日の報告】

### ✦ 泉揚水機場

出発地の手賀の丘公園につく前、バスの中で講師の山口さんより説明あり。

- ◆ 手賀沼は江戸時代から干拓が行われ、特に8代将軍吉宗のときは熱心に行われた。手賀沼大橋から東側には「新田」と名のついたところがたくさんあるが、いずれもその村の人がつくった開拓地。人は台地の上に住んでいるので、新田は大水が出ると水につかる場所だった。
- ◆ 台地の上には墓も多く、古墳も沼に面した台地の端にある。手賀の丘公園は片山古墳群を含むが、現在、そこがキャンプ場になっている。墓がキャンプ場になっている。
- ◆ 泉揚水機場から手賀沼の水を手賀の丘公園内の貯水槽に汲み上げ、これを円筒分水(後述)に送り、そこから旧沼南町全域に供給している。

### ✦ 手賀の丘公園

- ◆ 入り口から西側に向かって歩く。園内に多数の古墳があることを確認した(写真右)。
- ◆ 西側の出口より公園外へ。出口直前に庚申塔複数あり。庚申塔は60日に一度の庚申の日を60回やると建てるので、1基建てるのに10年はかかる。それだけ昔から人が住んできた証拠。



園内に入るとすぐ古墳が見える

### ✦ 円筒分水

- ◆ 公園の西側出口をでると、正面の道をはさんで右側は泉、左側は柳戸。泉谷津の上部の台地に広がる畑を歩いていく。
- ◆ 円筒分水～ハンドルがあり、必要な水量の水を割り振っている。農家に公平に水を分配するために考案されたもので、考案者は岐阜県の土木技師、可知貫一で、1914年(大正3年)に岐阜県小泉村に建設されたのが最初とされている(現存せず)。ここにあるものは一般に手賀沼円筒分水と呼ばれているが、



手賀沼の円筒分水は林の中にある。冬季は水なし

正式名称は泉円筒分水。昭和40年(1975年)に整備され、現在は手賀沼土地改良区が管理をしている。稼働は農業用水が必要な4～8月で、それ以外の季節は水が抜かれた状態にある。現

在、改修が予定され、もっと大きなものが作られる予定。このルートを通じて手賀沼のナガエツルノゲイトウ(特定外来生物)が柳戸谷津の水田に侵入したが、新しい施設ではナガエツルノゲイトウ対策も十分に行うとのこと。

❖ 柳戸谷津参道としぼり水

- ◆ 弘誓院への参道～柳戸谷津の台地から谷津田に下っていく道は趣のある隘路で、弘誓院への参道とのこと。参道の出口付近には小さな水路あり。円筒分水からの水だけでなく、付近のしぼり水も入っている。
- ◆ 水路出口には夏にナガエツルノゲイトウが繁茂したので駆除したとのこと。
- ◆ 参道を出て弘誓院に向かい、弘誓院の手前左の林に入ると、円筒分水からの水をためる吐水マスが見られる。周辺はしぼり水で湿地化している。マスの中でサワガニが死んでいた。



❖ 弘誓院(ぐぜいいん)と柳戸谷津

- ◆ 蓬萊山弘誓院福万寺は真言宗の寺院で、平安時代の創建と伝えられる。聖観音菩薩像(60年に一度のご開帳)と妙法蓮華経版木は県指定文化財。境内には2本の大イチョウやシイの大木もある。
- ◆ 柳戸谷津の台地の上に家々があり、下ってお墓のある弘誓院があり、すぐ近くまで手賀沼の水が来ていて、船で弘誓院参りができたとのこと。柳戸谷津の「戸」とは船着き場のことだそう。



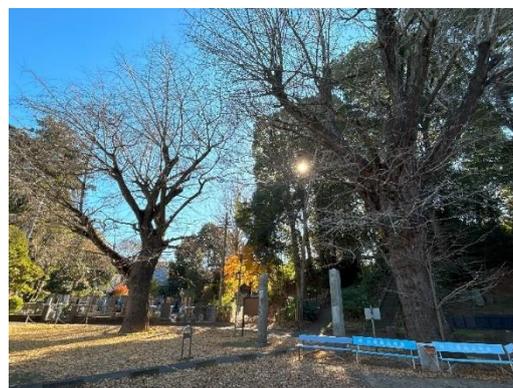
標識もない切通しが弘誓院への参道



円筒分水の水はこの吐水枥にも届く。送水管の左側はしぼり水の湿地



(左)柳戸谷津を手賀沼方向(林の切れ間)に歩く。昔はここまで水が来ていた



(右上)弘誓院の夫婦イチョウ。じつは2本とも雌木。(右下)境内には端正な趣がある

✂ レクチャー「手賀沼と谷津の自然と歴史について」(概要)

講師/かしわ環境ステーション 山口由木さん

- ◆ 古東京湾の海底だった場所が寒冷化で陸地化したり、温暖化で海底になったりを繰り返し、現在の地形になった。
- ◆ 古くから谷津と谷津の間の台地に人は住んでいた(遺跡や貝塚も多い)。縄文時代、手賀沼は海(奥鬼怒湾)だったので魚や貝をとっていた。貝は最初ハマグリで、時代が下るとシジミになる。海が後退して淡水が入り汽水になった。平安時代は「手下の水海(てかのみずうみ)」と呼ばれていた。
- ◆ 江戸時代には利根川がつけ換えられ、銚子へ。そのとき手賀沼は完全に沼になった。
- ◆ 干拓は江戸時代に始まった。〇〇新田と名のついているところはすべて干拓地。ただし、利根川上流に大雨が降ると水が逆流し、水面に戻るという繰り返しだった。
- ◆ 明治期、相島新田の井上さんがポンプによる機械排水を導入。大々的な干拓は戦後。引揚者等で人口が増加し、戦争で国土が荒れ食糧難だった。食糧増産のための干拓は全国共通の事業だった。
- ◆ フィッシングセンター前に干拓用に堤防がつくられた。最初にできたのは布瀬の第1干拓地。次に我孫子側の第2干拓地。第2干拓地には排水路があり、排水路の南側が柏、北側が我孫子市。手賀川が市境ではない。
- ◆ 干拓で沼が半分になった。手賀沼は利根川から土砂が入ってくるので、東側のほうが浅い。東半分がまず干拓された(第1干拓地)。
- ◆ 集落は台地上にあり、畑や果樹園(栗や柿)がある。林の面積が大きく、木材は建材、薪、炭などに利用。村人は谷津も台地も手賀沼も使って生活した。
- ◆ 林は複数の集落で共同で使った(入会(いりあい)地)。柏市沼南では現在のアリオ周辺に飛び地が多く、「岩井」「鷺野谷」等呼ばれている。入会地をあとから分けたため。
- ◆ 家は通常谷津にはない。水害時浸水するので、谷津より2~3メートル以上の高台に建てる。かさ上げすることもある。谷津はほとんど水田。
- ◆ 沼と谷津と台地はひとつの生態系。水路の生態系も豊か。手賀沼から上がったウナギが谷津の水路や田んぼでとれたりしていた。ドジョウやシジミは今もいる。
- ◆ 台地と谷津は雨水を保持する。有機物が水路を通って手賀沼に入る。手賀沼には魚が生息し、水草が生える。水草は肥料にも使われた。循環型で自給自足の生態系が1000年くらい続いた(平安・江戸時代~昭和のはじめまで)。
- ◆ 沼の漁業ではウナギ漁が有名。手賀沼のウナギは高級とされた。冬はカモ猟が行われた。水草を沼から取り出して干し、肥料として土の中にすき込んだ。子どもたちはタマツケ(カラスガイ)をとった。
- ◆ 船が主な交通手段。栈橋や港はなく、岸から船を出す。「船戸」「柳戸」の「戸」は「渡」の意味、谷津の出口の平らになったところ。
- ◆ 問題は水害。大雨になると沼の水位が上がり、手賀沼の水が逆流して田んぼが水浸しになる。水害が解消されたのは木下に排水機場ができてから。水門で手賀沼の水位を調節。

- ◆ 曙橋の手賀調整水門は閉めると水位が上り水害になるので使われなかった。近々撤去の予定。
- ◆ 吐水設備は谷津の最上部に作られ、田へ水が供給される。これらの設備は老朽化し、ほとんどが建て直される予定。
- ◆ 干拓後の変化で大きいのはコメの減反、宅地開発。水田の畑地化など。
- ◆ 市街化に伴い生活排水が手賀沼に入るようになり、水質の汚濁、アオコの大発生、ヘドロの堆積が起きた。これを解消するため北千葉導水路がつけられたが、水で薄めて利根川に流しているようなもの。
- ◆ 水の貯留の問題も。水田の減少により台地、谷津の保水量が低下している。水田の畔には大量の水が貯留されるが、畑には畔がなく貯留量は少ない。最近では台地上に家が建っても、雨は側溝から直接川に流され、地面に浸透しない。加えて最近の家は庭をコンクリートで固めている。雨水が浸透しない。結果として湧水が出ない。
- ◆ 一方、沼には側溝などから直接水が入るので水量が増え、木下排水機場の能力を超えてしまった。平成の終わり頃から水があふれるようになった(令和元年の台風19号など)。
- ◆ 柏市には谷津保全指針があり、我孫子市も保全対策に取り組んでいる。何とか自然の生態系を維持し、土地の保水力や有機物の堆積などを維持したいと思う。この自然は原自然ではなく、何百年も人が手を加えてきた自然。今後、どうやっていくか考えながら、沼だけでなく台地と谷津と沼が一体となってどうしていくか考えてほしい。

#### <Q&A>

(参加者)柏市では地下浸透ますの設置が義務づけられているから、貯水量には問題ない。

(参加者)浸透ますを作ってもキャバが違う。

(参加者)湧水が涸れているのは間違いない。林など水分が涵養される場所が減っている。

(参加者)緑地を残す活動も大事だし、新開地に浸透ますをつくることも大事。

(参加者)柏ではモクを一度乾燥させたとのことだが、我孫子ではそのまま撒いたと聞いた。

(講師)柏では谷津の出口で船からおろし、横の岸に積み、ちょっと乾いてから撒いたそう。

(参加者)湖北では、陸地が乾くので水分補給をかねてそのまま置いたと聞いた。

(参加者)「落(おとし)」とはどういうものか。

(講師)大きな谷津でむしろ川に近いもの。金山落、染井入落、大津川(佐津間落、鎌ヶ谷落)などがあり、それぞれの落としに注ぐ小さな谷津がある。大根切谷津は染井入落に注ぎ、手賀沼に注ぐ。

(参加者)湧水池は谷津の奥にあるか。

(講師)台地の下から湧き出すので、主に谷津の出口にある。ただ、台地に降った水がどこから出てくるか、地形によって違う。

(参加者)耕作放棄地を湿地として残せば役にたたないか。

(講師)複数の谷津を年間調査しているが、放棄地で湧水のあるところは湿地になる。ハンノキやヤナギが生え、それなりの保水力がある。カナムグラなどが茂って見た目はよくないが、自然としてはいいのだろうと思う。こういう場所をそのまま保全しようという動きはある。北総線大町駅の大町自然公園も谷津だが、木道をつくり自然のまま公園にしている。そういうやり方もある。

(講師)ただ、基本的に農家が所有する生産地なので、地主さんとの話が大事。柏市の谷津保全指針では何カ所かの農家と契約し、埋め立てない代わりにわずかだが支払いしている(1㎡20円程度)。新田は広大で平らなので耕作を法人に頼めるが、谷津は個人所有で狭く生産性が低いので、法人はむずかしい。それでも、先祖伝来の土地をつぶしたくなく、法人に依頼しているとのこと。

(参加者)谷津の自然を残すにはどうしたらいいか。

(講師)沼南町に谷津が残るのは交通が不便だから。昔、水運のころは木下～布瀬が主要路で、手賀沼の中心だった。沼南町役場も柳戸にあった。今公園になっているが、役場の門柱が残る。

### ❖ 龍泉院～大根切谷津・原ノ下谷津

- ◆ 講義後、バスで龍泉院へ。曹洞宗天徳山龍泉寺は建長5年(1253年)建立の古刹。地域の寺として大事にされてきた趣のある寺院。毎月行われる参禅会も50周年になるという。
- ◆ 龍泉院の左側の塀に沿って谷津へ降りる。下りきった場所は谷津から枝分かれしている枝谷津のひとつである原ノ下(はらのした)谷津。最奥部が見える。
- ◆ 原の下谷津と大根切(おおねぎり)谷津合流点では両谷津が見渡せる。



龍泉院正面。この日はご住職が月例の托鉢日でお留守だったため、外からのみ拝観



谷津の合流点。中央の林の右側が大根切谷津、左側が原ノ下谷津



谷津へ続く竹の道

- ◆ 大根切谷津では谷津田の際に湧水の溜まりがあることが確認できた。
- ◆ 柄澤さん、山口さんには全行程ご同行いただき、谷津や生き物についての解説をいただいた。柄澤さんの以下のお話が印象に残った。

「谷津には4種のカマキリがいる。オオカマキリは林縁に、チョウセンカマキリは水田に、コカマキリは低地に、ハラビロカマキリは木の上に主にいるが、谷津にはそれだけ多彩な自然がある。日本は地球の生物多様性のホットポイントと言われるが、その中でもホットポイントは谷津」

- ◆ 龍泉院に戻り記念撮影。柄澤さん、山口さん、参加者の皆様、お疲れさまでした。

